

4-1-17 薬剤部

1. 概要、特色

小児の薬物療法は成人とは違った特別な情報・技術が必要であり専門性が高い。このため薬剤部では専門性の高い薬剤師教育を行い、医療チームの要望に応じている。また、薬剤部では当センターの特色である電子カルテ・IT機器を積極的に活用し、医薬品のバーコード管理によるリスクマネジメントや薬歴管理データベースの構築を実践し、医薬品の安全管理・適正使用及び経営管理に大きく貢献している。加えて我が国における小児科領域及び周産期領域の医薬品情報収集の中心的施設として薬剤データベースの構築に大きく関与し、小児・周産期領域の専門的な医薬品情報の発信、医薬品の適正使用の推進に向けた提言を積極的に行っている。

1) 薬歴管理データベースを活用した医薬品疫学調査と安全性情報収集

薬歴データベースは、小児や妊産婦に用いる医薬品の疫学調査や安全性情報の収集、効率的な医薬品の管理を目的として、いわゆる処方歴の蓄積ではなく、患者に医薬品が実際に投与された実施歴を蓄積している。システムはバージョンアップを重ねて、臨床的にも経営的にも有効な情報を抽出し提供できるように整備を行ってきた。

開院後6年が経過した平成20年3月の新システム移行時には特筆すべき項目として、小児領域で必要とする剤形変更（錠剤粉碎等）処方抽出を可能とした。このことにより、小児領域の調剤における剤型変更率が医薬品毎に抽出可能となり、厚生労働科学研究の基礎資料作成に役立っている。更に注射薬においては、輸液投与量のデータと共に時間経過のデータも抽出可能としたことから、今後の疫学調査が可能な範囲が拡大した。

2) バーコード認証、処方チェックシステム等ITシステムを利用した医薬品リスクマネジメント

薬剤部で医薬品に患者認証バーコードを付与することにより、患者への誤投与防止を実践して全国的にも高い評価を得ている。持参薬についても病棟での認証が可能である。また、医師の処方時に薬用量や併用禁忌などの医薬品チェックを行うシステムを構築し適正な医薬品使用への支援を行っている。

平成20年3月の新システム移行に合わせて、さらなるバージョンアップを行い、処方チェックシステムが充実した。処方医師のグループ分けなどにより、チェック結果表示などを適切に行うことで、処方オーダー時のストレス軽減につながると考えている。チェックシステムへのデータ登録などは、これから順次薬剤委員会等の審議を経て搭載する予定である。

3) 小児科領域の医薬品適正使用を目指した小児薬物療法データネットワークの中心施設としての役割

小児科領域の医薬品の適応外使用問題などを改善し、医薬品の適正使用を推進するため、全国小児専門医療施設、一部の国立病院機構成育医療ネットワーク基幹病院及び大学病院などの薬剤部を中心とした小児薬物療法ネットワークを構築し、病院開院以来その中心施設として小児薬物療法の使用実態調査などを実施することで、それらの結果を規制当局及び製薬企業に問題提起を行っている。

平成19年度は小児科領域の汎用医薬品の用法・用量実態調査、小児に関わる添付文書記載のあり方などの調査及びネットワークを活用して厚生労働省「小児薬物療法根拠情報収集事業」における小児用医薬品の使用実態調査への参画に加え、「小児科領域での投薬に適した医薬品剤形のあり方と、剤形変更した医薬品の安全性・有効性の確保に関する研究」を開始して小児への投薬に

必要な剤形の問題の調査を実施している。

4) 妊産婦に対する医薬品情報提供・収集の中心的施設（妊娠と薬情報センター事業への参画）

平成17年10月に厚生労働省の事業として当センター内に「妊娠と薬情報センター」が設置された。本事業は、周産期診療科と薬剤部との共同で実施しており、妊婦や妊娠を希望する婦人の服薬に関する疑問に対応し、かつ相談者の妊娠結果を追跡調査することで現在情報が少ない妊娠時の服薬の安全性に係わるエビデンスの確立を目指している。平成19年度の相談申込件数は前年度の倍の711件/年となり、全国に5施設の「妊娠と薬情報センター」協力病院も設立された。薬剤部は医薬品情報管理業務の重要な業務として今後も積極的に本事業を推進して行く。

5) 治験・臨床研究の基盤整備に参画

小児科領域の治験・臨床研究は製薬企業にとっての採算性や被験者の獲得に対する困難さなどから積極的に行われていない事実がある。このような状況を少しでも改善するため、薬剤部は治験・臨床研究の基盤整備にも積極的に関与している。

6) 小児、周産期関連の専門薬剤師育成に向けた教育活動

小児の調剤は成人と異なり、錠剤の粉碎や医薬品の濃度変更など、成人用剤形を小児用に変更して小児が安心して服用できるような調剤を行う必要がある。このような小児の薬物療法は特殊な情報・技術が必要である。妊婦・授乳婦を対象とした薬物療法についても、最新の情報を基に行わなければならない。薬剤部では学生実習や研修会主催、全国での講演活動などを積極的に実施することで妊産婦に関わる情報提供、小児の専門調剤、特殊製剤、注射無菌調製、服薬指導などの全国に向けた指導を継続して行い、専門薬剤師の育成に力を注いでいる。

2. 平成19年度業務実績

- 1) 処方せん枚数： 入院 85,649 枚、外来院内 18,800 枚、外来院外 79,678 枚
- 2) 注射処方枚数： 入院 230,889 枚、外来 26,661 枚
- 3) 薬剤管理指導： 実施患者数 1,429 人、請求件数 897 件、退院時服薬指導加算 408 件
- 4) 薬剤情報提供： 9,024 件
- 5) 院内製剤加算： 実施件数 1,273 件、請求件数 292 件
- 6) 無菌製剤加算： 実施件数 15,164 件（IVH6, 991 件、抗悪性腫瘍 25 件）、請求件数 3,763 件
- 7) 注射混注件数： 8,148 件
- 8) 医薬品安全性情報報告件数： 7 件
- 9) 院外処方せん発行率： 80.9%

注. 1)～8)はH19.4～H20.3の合計、9)はH19.4～H20.3の平均

3. 公的研究補助金による社会的研究活動

1. 石川洋一（主任研究者）、榎田賢次（分担研究者）、村山純一郎（分担研究者）、中村秀文（分担研究者）、寺門浩之（分担研究者）：平成19年度 厚生労働科学研究費補助金 医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業「小児科領域での投薬に適した医薬品剤形のあり方と、剤形変更した医薬品の安全性・有効性の確保に関する研究」

4. 薬剤部にて実施した研修および勉強会

<外部向け研修>

1. 独立行政法人 医薬品医療機器総合機構 病院研修 2名
2. 薬学部大学生病院実習 8名
3. 臨床薬学大学院生病院実習 2名

<院内向け研修>

1. 薬剤部セミナー

薬剤部では、薬剤部員の研鑽と資質向上を目的として勉強会を開催している。

平成19年度の開催実績：原則として月2回、木曜日の17時30分より約1時間、開催回数—17回、演題—15題（内訳は、製品概要説明会2回、治験説明会4回、臨床・学術勉強会9回）

2. 薬剤部・総合診療部共催セミナー

薬剤部・総合診療部薬剤研修会：処方がどのような形で調剤され患者に提供されるか、服薬指導時の注意、処方薬の実際の味等を臨床医が研修。

第1回 薬剤部室 2007.9.6

第2回 薬剤部室 2007.9.18

5. 薬剤部員による研修等の講演

<外部向け研修>

1. 石井真理子： 妊娠と薬のカウンセリングの実際。 第2回妊娠と薬情報センター研修会。東京。2008.3.14.
2. 石井真理子： 妊娠と薬の基礎知識。 国立看護大学校 助産師課程 東京。2007.6.22
3. 石川洋一： 高リスク患者・小児患者への薬学的ケアの実際。 新カリキュラム対応研修講義研修会。日本薬剤師研修センター。東京。2007.10.28
4. 石川洋一： 治験のIT化と電子カルテ対応。 平成19年度国公立大学病院治験コーディネーター養成研修。東京。2007.7.6
5. 石川洋一： 治験のIT化と電子カルテ対応について。 平成19年度日本病院薬剤師会 薬剤師治験コーディネーター養成研修会。東京。2007.8.21
6. 榎田賢次：東京・広島・札幌、 石川洋一：福岡、 中島研：名古屋・大阪・仙台：小児・妊婦・授乳婦の薬物療法。 平成19年度 病院診療所薬剤師研修会「医療の質と安全における薬剤師の役割」2007.6.2、2007.6.23、2007.7.7、2007.9.1、2007.10.27、2007.11.17、2007.11.18

<院内向け研修>

1. 小村誠： 静脈注射に必要な薬剤の知識。 平成19年度看護部教育セミナー。2007.7.24
2. 関口英之： 麻薬・向精神薬等の使用と管理。平成19年度第1回医療安全・感染対策研修会。2007.4.16
3. 筒井秀知： 処方・注射オーダーと医薬品管理について。平成19年度新採用者研修。2007.4.4。2007.5.2。2007.6.4。2007.7.3。2007.8.2。2007.9.4。2007.10.2。2007.11.2。2007.12.4。2007.1.7。2007.2.4。2007.3.4。

6. 薬剤部の見学

関信地区国立病院薬剤師会

神戸薬科大学関東支部

財団法人日産厚生会玉川病院

東京都立梅ヶ丘病院
東京都立清瀬小児病院
東京都立八王子小児病院
日本自動認識システム協会
山口大学医学部附属病院